

<b>Title</b>	音声中心のフォニックス指導
<b>Author(s)</b>	東, 仁美
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,18(3) : 105-118
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=76">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=76</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 音声中心のフォニックス指導

公立小学校高学年での文字導入の試み

東 仁 美

Teaching Phonics in Authentic Contexts:  
An approach to the acquisition and development of basic literacy  
in English at the elementary school stage

Hitomi HIGASHI

*The Practical Handbook for Elementary School English Activities* published by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology states that English activities at public elementary schools should focus on spoken English and that, during the elementary school stage, it is important to separate spoken and written English, with instruction focussing only on spoken English.

However, in actual teaching situations, fifth and sixth grade students are curious to learn how to read English. In recent studies, many researchers assert that we should not be too hesitant to teach the alphabet or phonics to elementary school students.

This paper intends to give some ideas as to how to introduce the sounds of English to Japanese elementary school students.

---

Key words: English Activities at Elementary School, Phonics, Whole Language

## 1. はじめに

東京都品川区は、平成15年7月に構造改革特区の小中一貫教育特区に認定され、平成18年度より区内公立校全校で小中一貫教育への移行が始まることになった。小学校での英語教育に関しては、平成15年度に特別教科「英語科」カリキュラム検討委員会が編成され、品川区教育要領英語科学習指導指針が検討されてきた。品川区の小中一貫教育では、小学校の英語活動と中学校の英語科をつなぐために9年間を「4 - 3 - 2」のまとまりで考え、児童・生徒の実態に応じた統一的で一貫性のある「英語科」としてカリキュラムを編成する。これまでは、小学校の英語活動、中学校の英語

## 音声中心のフォニックス指導

科の授業であったが、今後中間の5～7年生では小学校と中学校のスムーズな接続が必要となる。

この小中一貫教育移行の動きに伴い、区内の公立小学校では、総合的な学習の時間の中での英語活動をさらに工夫・改善する動きが出始めている。筆者が過去三年間外部講師として英語の授業を行ってきた品川区立城南小学校においても、この動きを受け、平成15年度から5、6年生対象にフォニックス指導の導入を独自に始めた。また、品川区立八潮北小学校においても学校側の要請を受け、平成15年度から6学年の三学期に筆者がフォニックス指導を行っている。

このように小学校での英語の準教科化への移行が始まっている品川区などの教育特区では、中学校の英語科へのスムーズな移行のため、文字指導をいかに導入していくか、そのカリキュラムの内容が大きな課題となっている。本稿では、音声中心のアルファベット導入の実践を報告することにより、高学年英語活動の中での文字指導の可能性を考察していきたい。

## 2. 文字の導入

『小学校英語活動実践の手引』（2001）によると、総合的な学習の時間での「英語活動」では、音声と文字を切り離して、音声を中心とした活動を心がけ、中学校の学習内容を先取りするようなことは避けなければならないとされている。

品川区立城南小学校では、公立中学校での文字導入の実態を把握するために、平成17年4月に区内18校の公立中学校の協力を得て、以下のようなアンケート調査を実施した。

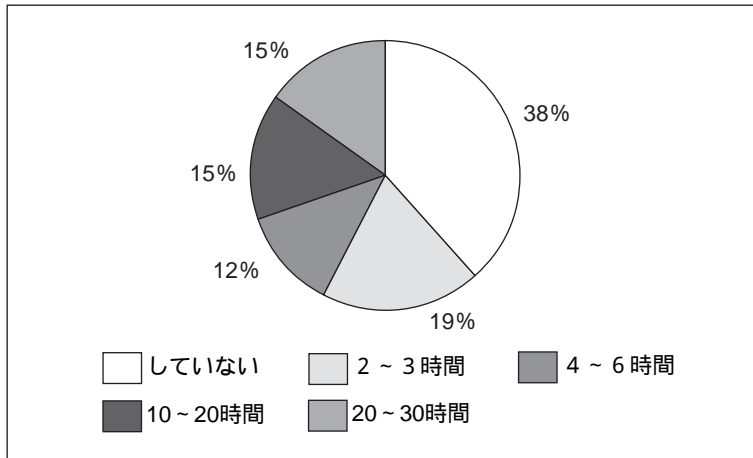
### 2.1 小学校の英語活動に望むこと（複数回答）

間違っても楽しくコミュニケーションできる態度の育成	62.5%
アルファベット（ローマ字）と発音の指導	45.8%
聞くことと話すこと中心の指導	29.2%

中学校での英語科では、アルファベット導入の時間が限られているという現実があり、半数近い中学校英語科教員から小学校でのアルファベット指導への希望があった。高学年での音声中心のアルファベット導入は、中学校英語への滑らかな接続の一要素と考えることができるであろう。

## 2.2 中学校でのフォニックス指導の実態

表1. 年間授業時数



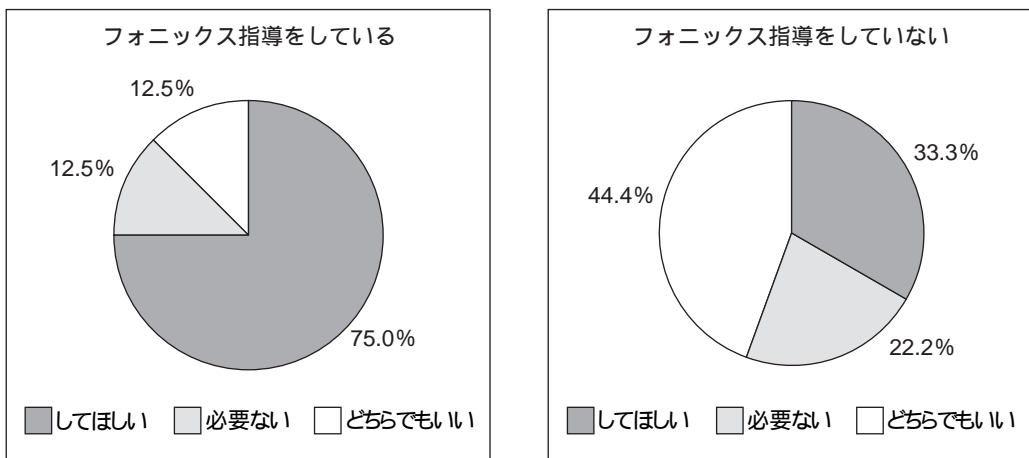
年間のフォニックス指導時間数に対する質問では、38%の中学校が全くやっていないと回答している。データからわかるように中学校でのフォニックス指導は、英語科教員の自由裁量であり、その実施状況にもばらつきがある。年間20～30時間フォニックス指導をしている中学校の中には、フォニックスのワークブックを副教材として使用し、毎回の授業で取り組んでいる学校もあった。

## 2.3 小学校でのフォニックス指導への期待

「小学校でフォニックス指導をしてほしいか」の質問に対しては、中学校でフォニックス指導をしている学校としていない学校の回答に分けてデータを出した。

「小学校の英語活動でフォニックス指導をしてほしいか」の回答では、フォニックス指導を取り入

表2



れている中学校と取り入れていない中学校の間で見解に大きな隔たりがあることがわかる。フォニックス指導をしている中学校の75%が小学校でのフォニックス指導を希望していることから、中学校の英語科教員がフォニックス指導の有効性を認識した上で、英語学習入門期での文字指導の充実を期待していることがうかがえる。

多田（2005）によると、英語学習の入門期にはまず「聞く」「話す」を十分に行うことが重要であるが、子どもの発達段階を考えると高学年になると「読みたい、書きたい」という文字への知的欲求が生じるのは自然なことである。音声指導の次の段階として、文字の指導をことさら遅らせたリ、「読む」「書く」指導へとつなげることを無理に避ける必要はないといえる。

文字指導の意義は、以下のようにまとめることができる（JASTEC 関東甲信越支部 調査研究プロジェクト・チーム 2002）。

- ・子どもの発達段階で生じる文字への知的な要求（本能）に合致する。
- ・文字と音の関連を知ること、音声把握を自覚的、分析的にさせる。
- ・文字が記憶の助けとなり、時間を経過してもその記憶を保持させる。
- ・文字が読めるという意識は自分の力で文字から情報を得る技術となり、自立した学習態度を育て、それが学習意欲と興味を持続させる。

本研究では、高学年での文字導入の手法として、フォニックス指導法を中心としたカリキュラムを試作し、実践した。

### 3．フォニックス指導法

白畑（1999）によるとフォニックスは、「音素とアルファベットとの結びつきを教えることで、読む力を高めようとする方法。（中略）ももとは母語としての英語学習での読みの訓練をするための方法であったが、現在では外国語教育においても広く利用されている。」と定義されている。アメリカでは、19世紀末頃からこの指導法が開発され、1960年代には全ての教材になんらかのフォニックスが取り入れられるようになった。しかし、規則性を重視しすぎると、子どもを逆に縛りつけてしまうという批判が生じ、1980年頃に、その反動としてホール・ランゲージ（Whole Language）の理念が生まれた（JASTEC 関東甲信越 調査研究プロジェクト・チーム 2000）。読み書き能力に必要な知識・スキルを習得するフォニックス指導法と現実世界の課題を解決するための読み書き能力を身につけることを目標としたホール・ランゲージは、対立概念であると認識されてきた。しかし、赤沢（2004）は、ウィーバー（S.C.Weaver）の所論に則り、ホール・ランゲージの理論の中でのフォニックス指導の位置づけを試み、その実践を提言している。本研究においても、他の英語活動と切り離された形で行われ、そのルールの適用過程が軽視されているというフォニックス指導の問題点を認識しつつ、学習者の気づきを大切に、言語使用を促すための活動を心がけた。

#### 4．城南小学校の英語活動

品川区立城南小学校は、英語活動に取り組み始めて5年目になる。品川区教育委員会が区内公立小学校40校にALT派遣を始めた平成13年度から国際理解教育特別推進校に指定されている。ALT派遣時間配当も他校に比べて多く、校内研究として積極的に英語活動に取り組んできた。平成17年度は、全学年20時間のALT派遣があり、どの学年も担任とALTとのチーム・ティーチングで授業が進められている。指導案は、全学年担任が作成し、ALTとの事前打ち合わせを重視し、授業を行っている。平成17年度にフォニックス指導を受けている6年生は、2年時からALTによる英語活動を体験してきている。また、ほとんどの児童がパソコンでのローマ字入力を習得しているため、英語のアルファベットに対しても、最初の文字の音からその単語を読み取ろうという姿勢が育っている。11月までに6回のフォニックス指導が終了しており、3月に残り2回の授業が予定されている。

#### 5．音声中心の文字指導

十分なインプットを与えた上での文字指導という考え方から、フォニックスの導入は、高学年のみとした。城南小学校でのフォニックス指導では、1)ゲームやワークシートを多用した体験的な授業にする、2)音声中心に指導し、文字を書くことは導入しない、3)中学校の英語科へのスムーズな移行につながるよう配慮する、4)英詩や英語のポップソング、絵本などの中で実際に学んだフォニックス・ルールを発見し、読めることを確認する作業を取り入れる、という四点を柱とした。指導案は、授業者である筆者が作成し、担任はT2として指導した。1年目の7回の授業内容は、以下の通りである。

表3 . フォニックス指導・1年目(5年生)

Day 1 :	アルファベットの名前と音 身の回りの英語を読んでみよう : Play Station, Pocket Monster
Day 2 :	アルファベットの音 フォニックス・アルファベットを覚えよう
Day 3 :	アルファベットの音の足し算をしよう at, an, ap の word family : cat, fat, hat, can, fan, van...
Day 4 :	アルファベットの音の足し算をしよう et, en, ed の word family : pet, net, wet, hen, pen, ten...
Day 5 :	アルファベットの音の足し算をしよう og, op の word family : dog, frog, log, top, mop, stop
Day 6 :	a, o, u の音の聞き分けをしよう 図1~2参照 cap, cup, cop / hat, hut, hot / bag, bug, bog
Day 7 :	もっと複雑なルールに挑戦しよう ee, ea, sh, ch の word family : bee, tree, jeep, tea, sea, leaf...

フォニックスの授業では、きちんとした説明が必要である場合が多く、また児童に考えさせ、自由に意見を述べさせる機会を作るため、授業者は日本語も交えて授業を進めた。1つのフォニックスのルールに3つの単語を絵カードで示し、共通するルールに気づかせるような導入を心がけた。ルールを教えるために新しい単語を覚えなければならないという学習者の負担をなくすために絵カードの単語はできる限り既習の言葉や身の回りで聞き慣れている言葉を選んだ。

今年度の5年生のフォニックス指導では、地域ボランティアのアメリカ人講師がT1,学級担任がT2としてチーム・ティーチングを行っている。以下は、初回の授業を受けた5年生の感想である。

- ・いつもの英語の授業と違って、自分で考える授業なので、おもしろかった。
- ・英語の発音の勉強になるので、とてもためになると思った。
- ・アルファベットの授業では普段あまりやらないカルタ取りなどのゲームができて楽しかった。

図1 . 母音の聞き分け

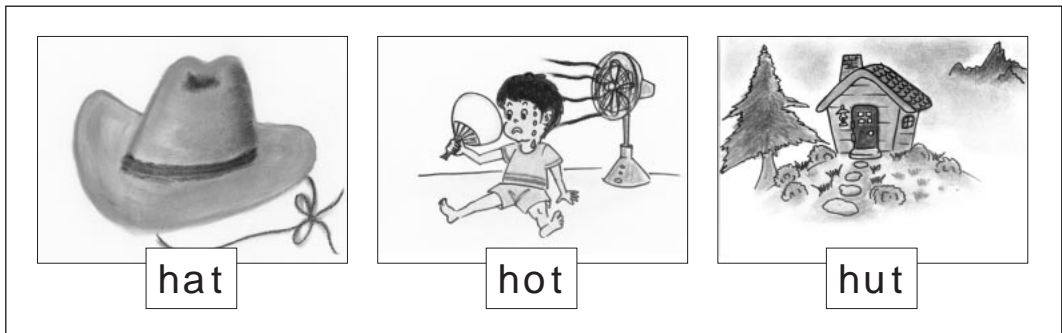
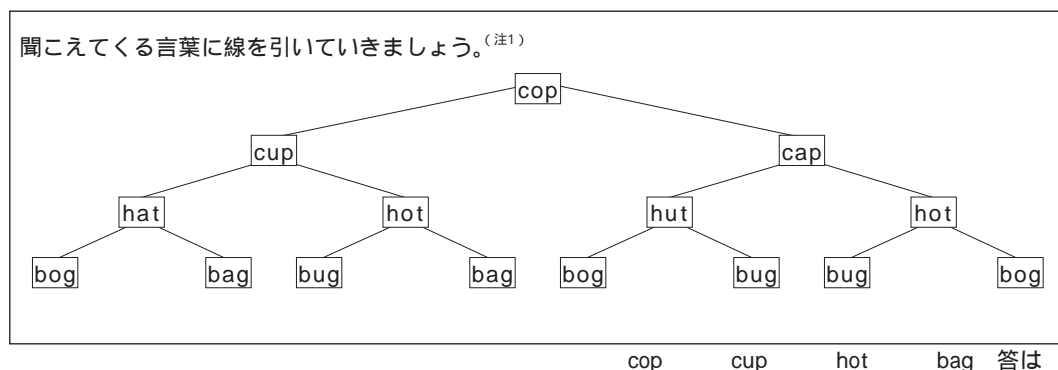


図2 . ワークシート1

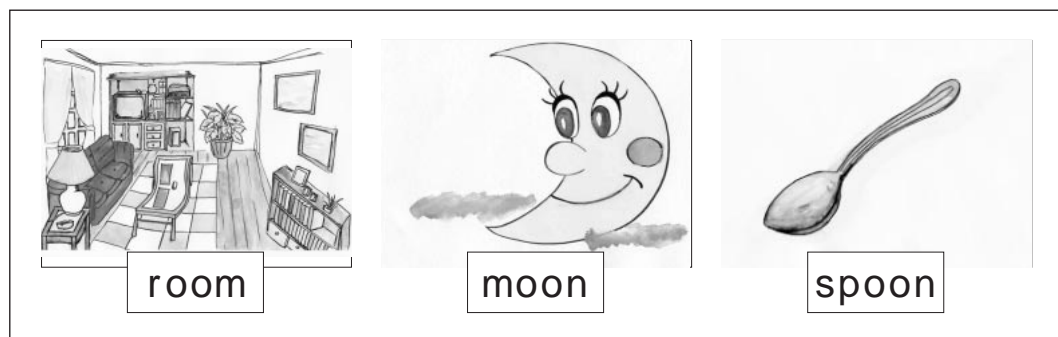


2年目の6年生の授業では、より複雑なフォニックス・ルールを扱うが、クラスの実態に合わせて、学習が定着していない場合は、次の授業でもう一度同じルールを復習し、ゲームやアクティビティを多く取り入れるように試みた。しかしながら、その一方で習熟度の差をあまり気にしすぎず、完璧を望むことがないよう心がけてきた。実際にマジック e の授業の中でルールを把握できなかった児童が、最終回の授業で、突然ルールに気づき、「あっ、わかった。」と歓声を上げたこともあった。以下の表は、2年目の指導計画である。

表4 . フォニックス指導・2年目(6年生)

Day 1 :	アルファベットの音の復習, 二つの文字のルール	sh, ch, ee, ea
Day 2 :	二つの文字のルール	oo[u], oo[u:], ar, ou      図3 参照
Day 3 :	二つの文字のルール	or, ir, ow[au], oy
Day 4 :	二つの文字のルール	oa, ow[ou], ay, ai
Day 5 :	マジック e	a-e, i-e
Day 6 :	マジック e	o-e, u-e, e-e
Day 7 :	総復習ゲーム大会	

図3 . oo [u:] の仲間の言葉





ルールをただの知識として終わらせないように、できる限り実際に使われている英語表現の中で、学んだルールを確認する機会を設けてきた。図4のハロウィーンの英詩は、oo[u], oo[u:], ou, arのルールを学んだ後に練習したものである。英詩の中で wood, room, house, car（下線は筆者による）の単語を確認することにより、既習のフォニックス・ルールがホール・ランゲージ理論での「言語の意味世界」として言語指導を促すための活動となった。

図4 . ハロウィーンの英詩

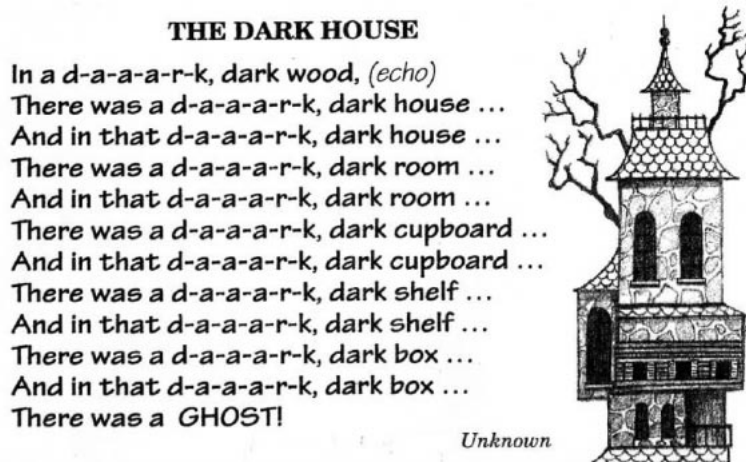


図5は、フォニックス指導の指導案の一例である。45分の授業の中でWarm-upにはアルファベットの音を復習するためにフォニックス・ジングルを唱え、英詩を朗読したり、既習のポップスを歌うようにした。ルールの導入の後、図6のようなボードゲームやカードゲーム、図7のようなワークシートなどを行い、アクティビティの中で実際にルールを確認できるような学習を取り入れた。また、ペアワークやグループワークの中で意見を出し合い、ルールに気づき、確認し合う機会をできる限り作った。

フォニックス指導の中で、複雑なルールを教え込むのではなく、ホール・ランゲージで強調される authenticity、つまり学習内容が、学ぶ側にとって現実の場で意味をもつ（横田, 1997）ということに常に念頭においてカリキュラムを作成した。学習者は、ゲームやワークシート、歌や英詩の中で実際にルールが使われることを確認しつつ、楽しみながら学習する機会を与えられた。

図5 . 指導案の例

学習過程	児童	担任	JTE	教材
あいさつ (1分)	JTE: Hello S: Hello. S: I'm fine, thank you, and you?	JTE: How are you? JTE: I'm great!		
Warm-up (6分)	フォニックス・アルファベットジングルを言う。 詩の朗読をする。 前時に学習した2文字連結の単語の復習をする。 oo, oo, ou, ow	アルファベットカードを見せながらアルファベットの音を復習する。 ハロウィーンの英詩の朗読をさせる。 2文字連結の単語絵カードを見せる。 oo: book, foot, cook oo: room, moon, spoon ou: house, mouse, blouse, ow: cow, town, owl		CD 英詩拡大 フォニック スカード 単語絵カード
復習 (5分)	似ている音のルールを整理して確認する。 ar, ir, or マジック w	単語を読んで仲間ごとに分類する。 ar: car, arm, park ir: girl, bird, skirt or: horse, fork, corn w+or= ir: word, work, worm		単語カード
活動② (10分) カルタ取り	6人グループに分かれてカルタ取りをする。 絵カードを見て、単語カードを取る。	絵カード、ハエたたきを配る。 絵カードを一枚ずつ見せる。カードが取れたら、単語を発音して答えを確認させる。		絵カード 単語カード ハエたたき
活動③ (12分) One-Two-Three-GO	6人グループで、中央にチップを置く。 "One-two-three-GO"の合図で4枚のうちいらぬカードを隣の人に回す。 ゲームをしながらの既習のルールを復習する。	ゲームの仕方を教える。 例えば or, fork, horse, corm のように仲間のカードが4枚そろったらチップを取る。チップは5枚しかないので、チップが取れなかったら負けとなる。カードを回す時は全員で "One-Two-Three-GO" 待ってもらいたい時は "Wait!" と言うルールを徹底させる。		絵カード チップ
活動④ ワークシート (8分)	ワークシートを行う。 わからないところはグループで相談する。	今日学習したことを学習シートで確かめる。 1. ar, ir, or の言葉を仲間分けをする。 2. 知っている言葉を英語で読んでみる。 card, start, shirt, first, World Cup, workbook		ワークシート
あいさつ (1分)	JTE: That's all for today. S: Thank you, ~, see you.	Let's review the phonics alphabet. JTE: See you next time.		CD
まとめ (2分)	評価カードをまとめる。	記入内容を把握する。		自己評価カード

音声中心のフォニックス指導

図6 . ガーナ式 × ゲーム (注2)

Ghanaian Tic-Tac-Toe

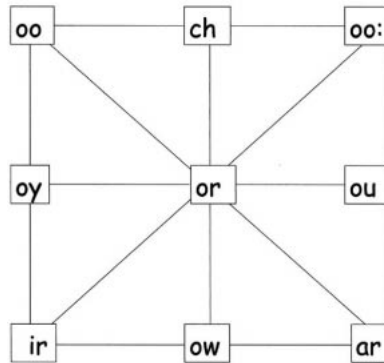


図7 . ワークシート2



6 . フォニックス指導の効果

従来の英語活動の中での高学年指導の難しさは、多く指摘されている。ある小学校での児童へのアンケートでは、「先生が無理に盛り上げようとしている気がしておもしろくない。」という感想があった。中学年までは楽しく参加していた歌やゲーム中心の英語活動に対して冷めた態度が出始める高学年では、フォニックス指導はその知的欲求を満たす活動になりうる。ただし、文部科学省は、「音声と文字とを切り離して、音響を中心とした指導を心がけることが大切である。」という立場を

取っており、本研究での実践のようなフォニックス指導の導入に対して小学校現場は概ね消極的である。また、きちんとした指導法で文字指導が行なわれないと、アルファベットを書く学習に終始してしまうという危険性もはらんでいる。小学校でのアルファベット導入では、あくまでも中学校の前倒しにならないような配慮が必要であり、その指導法の選択にも注意を払わなければならない。しかしながら、特に高学年では英語を読めるようになりたい、という知的好奇心が大きく、英語を読めることが、英語ができるという自信につながっている。フォニックスの授業を受けた6年生へのアンケート調査の結果を見ても、フォニックス指導が、英語嫌いを減らして中学校での英語学習への不安を解消するという役割を果たしていることがわかる。

以下は、実際にフォニックス指導を受けている城南小学校6年生に対しておこなったアンケート調査の結果である。

表4．アンケート結果 1

英語は好きですか（城南小学校 6年生）

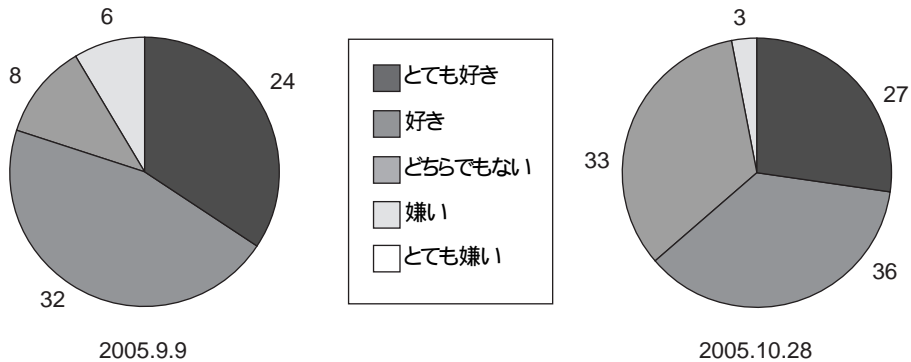
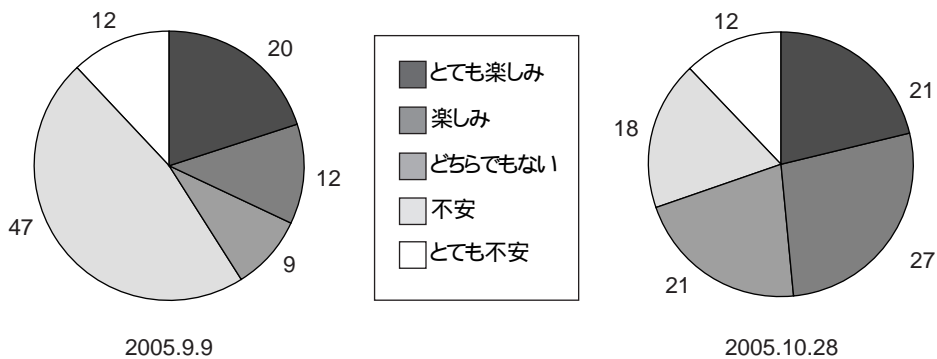


表5．アンケート結果 2

中学校での英語の授業は楽しみですか（城南小学校 6年生）



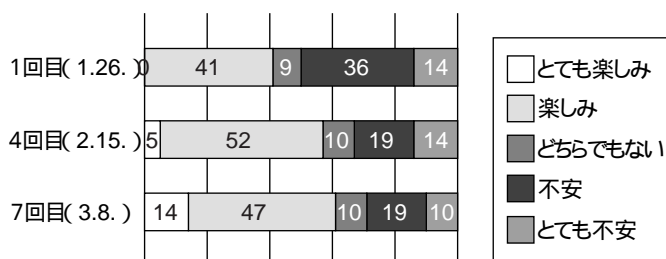
## 音声中心のフォニックス指導

このアンケートは、フォニックス指導初回の授業終了後と6回目の授業終了後の回答である。9月上旬のアンケートでは、不安・とても不安の回答が60%近くあったが、10月下旬のアンケートでは、不安・とても不安の回答が30%に減っている。フォニックスの授業を6回体験しただけでも、中学校英語に対する不安がかなり解消されていることがうかがえる。

以下のデータは、平成16年三学期にフォニックス指導を受けた八潮北小学校の6年生対象のアンケート結果である。こちらのアンケート調査でも、初回の授業時には、中学校の英語の授業が「不安・とても不安」の回答が50%あったが、7回のフォニックスの授業後には、29%に減少している。理由として「授業の進度が早そうについていけない不安」「英語をきちんと書けるかが心配」「おいて行かれそうで不安」といった回答があり、6年生は小学校で英語活動を体験していても、中学校英語を全く違った学習ととらえていることがわかる。高学年での文字指導は、将来の英語学習への自信につながり、学習意欲を促進するということがこれらのアンケート結果から推測できる。高学年の指導方法や小・中連携は小学校英語活動の大きな課題であるが、小学校での英語体験が中学校での英語学習の動機付けになり、学習意欲を高める一助になるよう、5、6年での活動には創意工夫が益々必要となるであろう。

表6．アンケート結果 3

中学校での英語の授業は楽しみですか（八潮北小学校 6年生）



## 5．今後の課題

音声中心のフォニックス指導を受けた児童は、英語のアルファベットが読めるようになったことで、中学校での英語学習に対して期待を持つようになってきている。また、文字指導の導入により、スキット練習、ポップスや英語劇、英詩の朗読など、今まで文字なしでは指導が難しかった小学校英語活動の幅が広がってきた。ただし、これまでの単発的な英語活動とは異なり、フォニックス指導は、ルールを覚えていくことの積み重ねが必要な体系だった学習であるため、既習のルールが定着していないと次に進めない、一度つまづくとなついていけない、といった問題点も出てきている。

また、フォニックス・ルールの定着に関して、評価をする意図がなくても、ワークシートなどでは正解が一つであり、できる子・できない子の認識を児童の中に作ってしまうという危険性も伴う。グループワークなど体験的な活動を多用し、カードゲームなどの繰り返しの中で理解に時間がかかる児童がルールを定着できるのを待つことが必要となろう。また、一度に全てわからなくても繰り返しの中で突然勘がつかめることもある、という励ましも必要である。

品川区で取り組む小中一貫教育の中では、1～4年生、5～7年生、8～9年生という発達段階を考慮した段階的な教育が行われることになる。小学校6年生から中学校1年生へのスムーズな移行が可能になるため、英語の指導にも大きな可能性が生まれてくる。その中で音声中心のアルファベット導入の授業研究は、一つの重要な課題となるであろう。

総合的な学習時間の導入以来、小学校の英語活動では「聞く・話す」が中心とされてきたが、中学校との連携を考えた時に、小学校高学年で音声中心のアルファベット指導を行なっておくことは、非常に効率的であると考えられる。指導法の研修や教材の選定が適切に行われれば、「音声を中心」「新たな発見をもたらす」「子どもの発達段階を踏まえた」という小学校英語活動のキーワードにも十分合致する内容のアルファベット指導が、教師の「創意工夫」によって展開されることが可能であろう。

本稿は、日本児童英語教育学会（JASTEC）第24回秋季研究大会（平成16年10月17日）における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。

#### 註

- (1) ALT が言う言葉を聞いて、正しいと思う方に線を引いていく。このワークシートでは、cop cup hot bag と発音され、正解は であるが、活動の目的は、正しい答えを出すのではなく、英語の母音を聞き慣れることである。
- (2) グループワークで行うガーナ式の ×ゲームである。二人がそれぞれ違う色のチップを3枚ずつ持ち、じゃんけんで順番を決める。交互にチップを置いていき、そのルールの言葉（ch: chicken, lunch, chair など）を言う。三枚のチップを置いてしまったら、次は自分の持ち駒を隣の枠に移動させる。先に自分のチップ三枚が縦、横、斜めのどちらかに並んだ方が勝ち。

#### 参考文献

- 赤沢真世「「ホール・ランゲージにおけるフォニックス指導の位置づけとその実践：C.S. ウィーバーの所論を中心に」『日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要』第23号，2004，pp.21-29
- Beall, P.C. & Nipp, S.H., *Wee Sing For Halloween*. Price Stern Sloan, 2002
- Eisele, C.Y., Sun, D. & Hsieh, R., *Mr. Bug's Phonics 2*. Oxford University Press, 1998
- Heilman, A.W., *Phonics in Proper Perspective*. Bell & Howell Company, 1976
- (A.W. ハイルマン著 松香洋子監訳『フォニックス指導の実際』玉川大学出版，1981)
- 岩崎統子『英語となかよし』開拓社，1984
- 『ワン・モア・ステップ』開拓社，1991
- JASTEC 関東甲信越支部 調査研究第二次プロジェクト・チーム「子どもの言語習得と文字 日本の

## 音声中心のフォニックス指導

- 子どもの英語学習における文字の役割について <基礎研究編>」『日本児童英語教育学会（JAS-TEC）研究紀要』第19号，2000，pp.35-47
- JASTEC 関東甲信越支部 調査研究第三次プロジェクト・チーム「子どもの言語習得と文字 日本の子どもの英語学習における文字の役割について <公立小学校に対する文字導入を視野に入れたカリキュラム試案>」『日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要』第21号，2002，pp.55-72
- Klause, A & Cossu, G., *Super Kids 2*. Prentice Hall, 1997
- 松香フォニックス研究所『みんなでフォニックス ワークブック上』松香フォニックス研究所・学校図書，2004
- 文部科学省『小学校英語活動実践の手引』開隆堂，2001
- Nakata, R. & Frazier, K., *Let's GO 2*. Oxford University Press, 1993
- Paul, D., *Finding Out 1*. Heinemann English Language Teaching, 1991
- Paul, D., *Teaching English to the Children in Asia*. Longman, 2002
- (D. ポール著 金森強監訳『子ども中心ではじめる英語レッスン 学ぶ力を育む英語の教え方』ピアソン・エデュケーション，2004)
- 品川区教育委員会（編著）『品川区小中一貫教育要領』講談社，2005
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則『英語教育用語辞典』大修館，1999
- 竹林滋『英語のフォニックス』ジャパントイムズ，1984
- 多田玲子「6.6 文字の導入とリーディング，ライティング指導」樋口忠彦・金森強・國方太司（編）『これからの小学校英語教育 理論と実践』研究社，2005，p.138
- 横田玲子「ホール・ランゲージの教室から アメリカの言語教育事情 1 ホール・ランゲージとは」『英語教育』大修館，5月号，1997，pp.34-36